

2013 年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞 受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2013 年度の学会賞が決定し、第 61 回秋季大会期間中の 2013 年 9 月 21 日に、北星学園大学キャンパスにおいて授賞式が行われました。

学術賞は小原眞知子会員（東海大学）が選ばれ、奨励賞として、論文部門からは蜂谷俊隆会員（関西学院大学）と鍋木奈津子会員（上智大学）が選ばれました。

尚、奨励賞単著書部門は「該当者なし」でした。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。

◆ 学術賞 小原 眞知子

受賞作：『要介護高齢者のアセスメント—退院援助のソーシャルワーク』
（相川書房 2012 年 5 月 25 日刊）



本研究の動機は、私が最初に就職した大学病院医療福祉相談室で、要介護高齢者の退院援助に深くかかわってきたことに始まります。リハビリテーション部門において、多専門職間で構成されるチーム医療メンバーの一員の私はソーシャルワーカーという立場で援助を行ってききましたが、ソーシャルワークの独自性と専門性を提示し、チームの中で貢献することは、常日頃からの大きな課題でありました。

その後、わが国は介護保険制度、相次ぐ医療法改正など、医療現場の状況は入院期間の短縮が迫られ、ますます厳しくなってきました。医療チーム内では、ソーシャルワークへの期待は高まり、その貢献度、質、効果性、効率性がますます問われるようになってきました。そこで、医療現場からアセスメントツールを開発することにより、理論と実践を融合させ、それを再度、実践現場に還元できる研究がしたいと思い、地道に研究を進めてまいりました。本研究の目的は 2 つあります。1 つは、退院後の介護形態の予測が可能な実用的なアセスメントツールの開発とその効率性・効果性の検証を行うこと。2 つ目は、介護が必要になる高齢者の退院援助において活用できるアセスメントツールの開発と専門職チームでの退院援助においてソーシャルワーク領域でのアセスメントの独自性を明示することから、我が国の保健医療分野に貢献できるような科学的根拠のある要介護高齢者の退院援助介入のアセスメントツールの開発を試みました。

受賞した拙著は 7 年前に書き上げた博士論文を修正加筆したのですが、様々な理由で世に出すことができませんでした。しかし今の時代だからこそ、実践現場でこの研究成果を活用していただき、ご批判やご助言を受けることで、今よりも効果性や汎用性の高いものが生み出されるのではないかと思い、出版する決意をしました。その決断が受賞に結びつくとは思いませんでした。

拙著が研究人生の到達点ではなく、出発点であったと言われるように、ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを忘れることなく、そのミッションとして、我が国の社会

福祉現場に貢献できる研究が行えるよう今後とも努力を惜しまず邁進していきたいと思
います。

◆ 奨励賞（論文部門） 蜂谷 俊隆



受賞作：『昭和 20 年代における糸賀一雄のコロニー構想と知的障害観』
（『社会福祉学』53 巻 1 号 2012 年 5 月 31 日発行）

この度、奨励賞を頂きましたことは、私にとっては全く思いがけないことであり、本
当に感激いたしております。

私は、この度の受賞対象となりました論文を含めて、これまで三本の論文を本学会誌に
投稿させていただきました。本論文は最後に投稿させて頂いたもので、それ以前の二本の
論文のもとに成り立っております。これらの論文の執筆にあたりましては、会員の皆様方
からは、様々な示唆や励ましを頂きました。そして、投稿に際しましては編集員の先生方
には大変お世話になり、とりわけ査読の先生方からは、厳しいご指摘の中にも、新たな研
究に向けた課題をご示唆頂き、そこから次に取り組むべき論文への展望が開けてきまし
た。ゆえに、この賞は学会から頂戴した賞ですが、対象となりました論文につきましては、社
会福祉学会によって書かせていただいたものと感謝いたしております。

糸賀一雄という社会福祉の歴史における存在の大きな人物の思想研究に、私のような研
究歴の浅い者が挑戦するということは大変におこがましいことではないかと思われること
もあり、実際にお叱りを頂いたこともありました。また、その活動範囲の広さや思想の深
さに接するたび、大きな象に小さな一匹の蟻がとりつく様なものではないかと、途方にく
れてしまうことも常であります。しかしながら、そのような先駆者の思想を、単に書かれ
た文字の通り受け取るだけでなく、その思想が生まれた背景や過程、そして果たせなかつ
た思いまで含めて学んでいくことが社会福祉には求められていると考え、それを支えにこ
れまで研究して参りました。

しかし、糸賀研究においては、まだまだ検討すべき多くの事項が残されておりますし、
その研究は戦後の障害児者福祉の全体像を再構成していくことのほんの一端に過ぎません。
本当に遅々とした歩みではありますが、今後もこの受賞を励みにいたしまして、地道に研
究に精進して参りたいと思えます。

◆ 奨励賞（論文部門） 鍋木 奈津子



受賞作：『市民参加型の在宅緩和ケア体制』
（『社会福祉学』53 巻 2 号 2012 年 8 月 31 日発行）

この度は、伝統ある社会福祉学会の奨励賞をいただくことができ、大変光栄に思ってお
ります。選考委員の先生方、査読委員の先生方、関係各位に厚く御礼申し上げます。

拙稿は、病院で医療ソーシャルワーカーとして勤務した経験や、在宅緩和ケアの現場で
ボランティアとして活動した経験を通して生まれた問題意識が契機となっております。近

年、在宅緩和ケア体制の整備が進められ、穏やかに家族に見守られて自宅で最期を迎える方も増えております。しかしながら、本人が住み慣れた自宅で最期を迎えたいと望んだとしても、独居であったり、ソーシャルサポートが不足している場合は、その願いを叶えられないこともあります。このような状況に対して、市民や地域の力を活用する必要性が、行政や現場から指摘されているものの、実際には一部の地域でしか導入に至っておりません。私自身も現場でボランティアとして活動し、市民の持つ可能性を強く認識しつつも、多くの現場で実現に至らない現状に対してもどかしい思いを持ってきました。また、在宅緩和の現場で活動するうちに、人間の尊厳ある最期の支援に対する問題意識を強く抱くようになり、これらの思いが本研究への原動力となりました。

本研究では、市民参加型在宅緩和ケアに関する先行研究が少ないため、長期に亘り市民参加型の体制を運営する組織を対象とした調査を行い、組織体制の変化過程や体制の有益性を説明することを試みました。

なお、本研究はいまだ途上にあり、現在も引き続き研究調査を継続しております。今後は、講評などでいただきました貴重なご指摘を受け止め、分析の理論枠組みや方法、一般化の課題などを精査し、誠実に研究を深化させていく所存です。

最後になりましたが、本研究は長きに亘りご指導いただいております栃本一三郎先生を始め、貴重なご助言をくださいました先生方、調査にご協力くださった皆様方の温かいお力添えによるものであり、この場をお借りして深く御礼申し上げます。